

使徒の働き11章23節 「主にすがる」

1A 心を堅く保つ

1B 心からの献身

1C 世の圧迫

2C 肉による反抗

3C 悪魔の惑わし

2B 意欲以上の献身

1C 逆境での思いの変化

2C 心での信仰

3C 堅く立つ勧め

3B 献身に与えられる力

2A 主にすがる

1B 祝福による誘惑

2B 主のみにある救い

3B 信仰から離れない勧め

本文

使徒の働き11章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは使徒の働き 10 章まで来ましたが、午後に 11 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、11 章 23 節に注目したいと思います。「バルナバはそこに到着し、神の恵みを見て喜んだ。そして、心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ました。」

10 章において、ローマの百人隊長コルネリウスの一家がみことばを信じ、救われたところを読みました。11 章には、異邦人への宣教がさらに前進します。ペテロは、エルサレムで、異邦人にも神が救いを与えられることを、他の兄弟たちに説明しました。そして、話は、エルサレムで起こった教会に対する迫害に戻ります。その迫害によって散らされた人々が、さらに北に向かって福音を伝えていきます。今のレバノンになるフェニキア、そして地中海の島、キプロス、それから、今はトルコ中部の南端にある、レバノンから少し北にある町、アンティオキアにまで行きました。当時、ローマ帝国の中で第三に大きな都市です。そこに来た時、一部の人たちがユダヤ人ではなく、ギリシア系の人たちにも語り始めました。そして、大勢の人が信じて主に立ち返ったのです。その知らせがエルサレムの教会の耳に入ったので、彼らはバルナバをアンティオキアに遣わしました。

そこでのバルナバの反応と、また行ったことがここに書いてあります。まず、神は異邦人をも救ってくださるのだということを知って、その大いなる恵みを喜んでいきます。そして、もう一つのことを

しました。「心を堅く保っていつも主にとどまっているように」と励ましました。二つの励ましです、一つは、「心を堅く保って」いるように、です。もう一つは、「いつも主にとどまっているように」です。この「留まっている」は、「すぎる」とも訳すことのできる言葉です。主にすがりなさいという勧めです。

1A 心を堅く保つ

イエス様を、罪からの自分の救い主、主として信じて受け入れた人には、この励ましが必要です。今、自分の決断したことが、果たしていろいろな迫害や困難、または誘惑などがあっても、それでもイエスを自分の主として生きていけるかは、また別です。多くの人がイエスを主と言ったとしても、それですべての人が天の御国に入れるかはまた別です。なぜなら、その信仰をいつまでも保っているかは、また別問題だからです。私は、バプテスマを受けた一人一人の方にお話します。「バプテスマは目標ではなく、始まりです。」キリストの弟子として生きることの始まりです。キリストの弟子の塾、キリスト弟子塾があるならば、バプテスマは入学式であって、卒業式ではありません。マラソンで、スタート地点に着く人は多いですが、ゴールにまでたどり着く人は少なくなります。多くの方はスタートにばかり目を留めますが、ゴールのほうに目を留めるほうが大切なのです。ヘブル人への手紙の著者は、こう言いました。「3:12-14 兄弟たち。あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにしなさい。私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です。」最初の確信を、終わりまでしっかり保ちさえすれば、キリストにあずかる者となるのです。

1B 心からの献身

バルナバは初めに、「心を堅く保って」いるようにと励ましました。キリスト者の生活を歩むことは、容易なことではありません。実は、聖霊の力と助けなしには、不可能なことです。私たちは、初めに、福音を聞いて、それに同意します。そして、イエスは自分にとって救い主です、と言い表します。そして、キリストにつく者として歩みを始めようとします。けれども、自分の意欲では到底できない類の歩みであることに、間もなくして気づくこととなります。世の教えとは、あまりにもかけ離れたのがイエス様の教えです。また自分の肉がこれでもか！というぐらいに反発します。そして悪魔からの強い惑わしがやってきます。

1C 世の圧迫

これまで自分が生きてきた世においては、あまりにも当たり前になっていて気づいていなかったことが気づきます。例えば、「得になることを、早めにやっておきなさい。」というものです。けれども、イエス様は教えられます。「20:35 受けるよりも与えるほうが幸いである。」自分が何を得ればよいかを教えますが、イエス様は何かを与えることが幸いだと教えます。そして、「今が楽しければ、それでいいのではないですか？」と世は教えます。けれども、イエス様は、「マルコ8:34 自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」と教えます。世は、「波風立てたら良くない。

人々が大方おこなっていることに逆らわないで生きて行こう。」と言います。イエス様は、「マタイ 12:30 わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしとともに集めない者は散らしているのです。」と言われました。また、「7:13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入っていく者が多いのです。」とも言われます。「世はあなたがたを憎む」とも言われました。世が常識だと思っていることは、ことごとくイエス様は真逆を教えておられるのです。

私は、キリスト者というのは、世の中で良い人間になるためのものだというのが、信仰を持つ前の印象でした。けれども、そうではなく、世の中とは聖め別たれた生活なのだという事です。

2C 肉による反抗

このようにして、世の流れに逆らう形で生きていくことになり、自分の内には、神のみこころ、神の命令に従わないぞ！と言わせる、肉の思いが出てきます。「ローマ 8:7 肉の思いは神に敵対するからです。」とあります。御霊によれば、「コロサイ 3:13 互いに忍耐し合い、だれかがほかの人に不満を抱いたとしても、互いに赦し合いなさい。」と教えられます。自分の霊もそれを証して、「そうだ、この人は赦さないといけない。」と言ってくるのです。御霊は、「I ペテ 3:8 みな、一つ思いになり、同情し合い、兄弟愛を示し、心の優しい人になり、謙虚でありなさい。」ところが、「いやだ、あのやってくれたことは決して忘れない。恨んでいるからね。」と言います。御霊は、「エペソ 4:25 あなたがたは偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。私たちは互いに、からだの一部なのです。」と教えます。けれども、肉は、「このことを本当に言ったら、自分を守れなくなる。嘘でも何でもいいから、言っていこう。」と言います。「II テモ 2:22 あなたは若いときの情欲を避け」と御霊は言いますが、自分の肉は、欲望を満たしたいと願います。

信じる前は、自分はそれほど悪い人間ではないと思っていましたが、信仰生活を送ればそれだけ、自分がどれほど醜く、反抗心が強いのか、嫌になるほど分かってきます。

3C 悪魔の惑わし

そして、悪魔の攻撃です。悪魔は偽り、惑わします。自分がどれだけ高慢になっているか見えなくなって、自分こそが正しいのだと思って、人々を見下し、分裂を起こします。また、神が罪だと言っているものを、巧みにそうではないと言って、罪を犯してよいようにさせます。そして、自分の肉の弱さに付け込みます。いや、自分が大丈夫だと思っているところが、最も危ういです。ペテロにイエス様は、「マタイ 26:41 霊は燃えていても肉は弱いのです。」と言われました。ペテロが、「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。」と言ったからです。悪魔は、この肉に対する自信を使って、まんまと罠にかけました。イエス様が、サタンの唆しが、この背後であったことを伝えておられます。「ルカ 22:31-32a シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。」

ペテロは言いました、「Ⅰペテ 5:8 あなたがたの敵である悪魔が、吼えたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。」パウロが言いました。「Ⅱコリ 2:11 それは、私たちがサタンに乗りられないようにするためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。」サタンは策略を持っています。これに対して、私たちは立ち向かわないといけないのです。

2B 意欲以上の献身

ですから、私たちには、「クリスチャンをやってみよう」という自分の意欲以上の、心からの深い決意が必要なのです。それが、「**心を堅く保**」つことです。

1C 逆境での思いの変化

私たちは結婚式において、誓約を交わしますね。「新郎誰々さん、あなたはここにいる誰々を、良い時も悪い時も、病める時も、健やかなる時も、富める時も、貧しき時も、死が二人を別つまで、妻として愛し、敬い、慈しむ事を誓いますか？」新婦にも同じことを尋ねます。その愛は、死が二人を別つまでであり、良い時だけでなく悪い時も、健やかな時だけでなく病める時も、富んでいる時だけでなく貧しい時も、愛し、敬い、慈しむのです。仲の良い男女も、それが結婚のための付き合いであれば、まるで話が変わってくる人が多いです。それは、単に自分が今、感じていること、思っていることよりも、はるかに深い献身や決意の思いがなければ、成し遂げられないからです。

結婚については、そういうものでしょうという心構えがあるかもしれませんが、多くの方が、イエス様を信じて生きていくことについて、どこかで、「都合が悪くなったら、やめておこう」というような行動を取ることがあります。目に見える伴侶がいれば、例えば、何日も家に戻らなかったら、自分の良心が痛みます。家に戻らずに、他の異性と時間を過ごしたら、なおさらのこと良心が痛むでしょう。ところが、イエス様に対しては、どこかで気軽さがあるのです。けれども、自分の力や意欲によっては、決して信仰生活は歩めないのです。「ヨハ 1:13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」神によって生まれているのですから、全く新たな生き方をしているのだと知り、それに従って歩んでいかなければいけないのです。

2C 心での信仰

「私は、主に従うと心に決めたのです。」と、決めてしまい、その人生を任せきってしまう必要があります。もう振り返らないと決めてしまうのです。それを思っているだけでなく、もっと深いところで、心で決めるのです。イエス様は四つの種類の土の喩えで、岩地に落ちた種は、土が深くなかったのですぐに芽を出したが、日が昇るとしおれ、根づかずに枯れてしまった、と言われていました。それは、「マル 4:16b-17 みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れますが、自分の中に根がなく、しばらく続けだけです。後で、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」とあります。思っていることや感じていることだけでは、状況が変わればその意志は砕かれて

しまいます。もっと深い部分、心で堅く保つのです。

ダニエルは、その模範的な人です。「1:8a ダニエルは、王が食べるごちそうや王が飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定めた。」心に定めたのです。そのことによって、ダニエルと友人三人が痩せこけてしまえば、世話をしている宦官の長が、文字通り王によって首が切られます。そのようなことがあっても、それでも彼は身を汚すまいと心に決めました。すると、神が助けてくださるのです。十日間、野菜だけを食べていたのですが、彼らは、肉を食べている他の少年たちと比べて、顔色が良く、からだつきも良かったのです。

3C 堅く立つ勧め

私たちは教会として、互いに勧め合います。そこで、人々は主によって養われ、建て上げられます。けれども、それだけでは不十分です。その上で、その信仰を堅くしていく必要があります。補強工事です。今も思い出しますが、東日本大震災で、東京のスカイツリーはまだ工事中でした。あれだけの大規模な地震であり、大きな振動でしたが、問題ありませんでした。堅くしているからです。パウロはコロサイ人に言いました、「2:7 キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおりに信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。」堅くして、あふれるばかりに感謝します。それから、テサロニケの人たちは、パウロの宣教によって信じましたが、パウロはすぐ逃げなければいけませんでしたが、迫害が来たからです。パウロは、彼らが信仰を保っているか心配でしたが、テモテが知らせてくれました。それで深く慰められましたが、こう言っています。「Ⅰテサ 3:8 あなたがたが主にあって堅く立っているなら、今、私たちの心は生き返るからです。」

3B 献身に与えられる力

主に心から献げた者は強いです。どんなことがあっても、起き上がりこぶしのように起き上がりません。ダニエル書では、ダニエルの友人は金の像を拜むのを拒んだので、燃える火の炉に投げ入れられましたが、無傷で、しかも真ん中に第四の人、神の御子がおられました。ヨブも、主は与え、主は取られる、主の御名はほむべきかな、という献身をしていたので、いろいろなことがありましたが、最後は神の憐れみを受けて、祝福されました。パウロもそうです。彼は主に従うことを心に決めていたので、その弱さの中にあって強められました。主がこう言わす。「Ⅱコリ 12:9 わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」それゆえに、こうも大体にいうのです。「ピリ 4:13 私を強くくださる方によって、私はどんなことでもできるのです。」

2A 主にすぎる

そしてバルナバは、「いつも主にとどまっているように」と言いました。モーセが申命記で、自分がこの世を去る時が近づいているのを知って語った中で、次のように言ったことがあります。「30:19-20a 私は今日、あなたがたに対して天と地を証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいをあなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、あなたの神、【主】

を愛し、御声に聞き従い、主にすぎるためである。」主にすぎる勧めです。信じるだけでなく、その信じていることの中に留まることです。イエス様も、ご自身を信じたユダヤ人たちに、「ヨハ 8:31 あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です。」

1B 祝福による誘惑

モーセがイスラエルの民に言ったことは、彼らが約束の地に入ってから、偶像に心が引き寄せられ、自らに呪いを招かないようにするためです。祝福の中にいるから、かえって主から心が離れ、他に自分を喜ばせる他の神々を求めていってしまうことのないように、ということです。同じように、私たちは、イスラエルの民が荒野の旅を歩んでいたように、自分にとって荒野のような困難がある時は主にすぎりますが、主がそこから救い出してくださると、かえって自分を喜ばせる生活に変えて行ってしまいます。他にも、福音書ではらい病人が十人、憐れんでくださいと叫んで、主が癒されたのですが、戻ってきて主を礼拝したのはたった一人の、サマリア人でありました。人間の心は、こうも主から離れやすいものです。

2B 主のみにある救い

そこで思い出さないといけないのは、主にのみ救いがあるということなのです。これらの祝福が自分を幸せにするのではなく、主自身が自分を幸いにすることをお忘れはいけません。「4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

3B 信仰から離れない勧め

ですから、みなさん、互いに勧め合いましょう。悪い心になって、信仰から離れることがないように。御言葉を聞いていても、信仰に結び付かず、肉の中に陥ることがないように。「ヘブ 10:23-25 約束してくださった方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白し続けようではありませんか。また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」